

「火薬陰謀事件」または  
「ガイ・フォークス・デイ」をめぐるつて

加藤 弘和

以下の文は研究ノートとも訳書解説ともいえないものである。なぜなら、本格的な研究のノートではないし、翻訳はほぼ完了しているが本にもなっていないからである。

一九九六年にアントニア・フレイザーの『火薬陰謀事件』が出版された。まえまえからこの事件に関心をもっており、早速読んでみて、なかなか良く書けていると判断し、翻訳に着手した。なぜこの事件に関心をいだいてきたかを説明し、その背景および事件について概略を書いてみたい。

世界的にみて宗教がからんだ抗争は、様相を変えなが

らも今日にいたるまであとをたたない。イギリスにかぎってみても北アイルランドの現状がすぐ頭にうかぶ。これが単純にカトリック教徒とプロテスタント教徒との宗教的な対立でないことは言うまでもない。政治的な抑圧によって信仰の維持が困難になるばかりでなく、生活のさまざまな面において制約・圧迫ひいては迫害をうけたときの反発は激しいものになり、テロ行為をひきおこす

にいたることもめずらしくない。一六〇五年の「火薬陰謀事件」は未遂におわつたが、テロリストが計画した事件だったとフレイザーは考えており、その著書の副題は、十七世紀初頭においてはまだテロリストあるいはテロリズムという言葉は使われていなかったが、「一六〇五年のテロリズムと信仰」となっている。

「火薬陰謀事件」はイギリスの歴史上重要かつ有名な事件であり、概略はよく知られている。当時イングルランドで抑圧されていた、つまり、「自国において迫害されるという残酷な目にあつていた」カトリック教徒のごく一部が、上院の地下に火薬を貯蔵し、議会開会日に国王はじめ議員たちを爆死させようと計画した事件であることは頭のなかにあつても、詳細については私などほとんどなにも知らなかった。だが、その記念日である十一月五日は「ガイ・フォークス・デイ」とよばれ、いまでも毎年かがり火がたかれ花火が打ちあげられ、おもにそのときどきに批判・憎しみの対象となつている人物の人形が焼かれており、議会開会前夜には、儀式的にはあるが、上院の地下室の搜索がおこなわれている。なぜこの

ような伝統が四世紀にもわたつて続いてきたのか、そのうち調べてみたいものだと思つていたところへ、フレイザーの本が出版されたというわけだ。ちなみに、十一月五日というのは、議会開会予定日であり、四日の真夜中ないし五日の早朝に政府側によつて火薬が上院の地下で発見され、その場にいたガイ・フォークスが逮捕され、事件が未遂に終わったことを祝つて市民がかがり火を最初にたいた日である。なぜこの日が「ガイ・フォークス・デイ」と呼ばれているかといえば、ガイは陰謀の中心人物ではないが、最初に逮捕された人物であり、逮捕の状況が劇的であつたので、事件を象徴する人物とみなされたためだ。フレイザーはエリザベス一世の晩年から書き出しているが、私はもう少し時代をさかのぼつて事件の背景についてまず簡単に書いておく。

十四世紀にジョン・ウィクリフ（一二三九？—一八四）は聖書の英訳をおこない、「宗教改革の先駆者」とよばれたが、イングランドは長いあいだカトリックの国だった。イングランドで宗教改革がおこり、イングランドが法王庁と断絶するのはヘンリー八世（一四九一—一五四

七、在位期間一五〇九―一四七二)の時代である。とはいえ、彼も若いころはルターを嫌い、教皇から「信仰の擁護者」というタイトルをもらったほどだった。本来宗教改革は法王庁に搾取されていた庶民のあいだから起こったものといつてよいだろう。ルターが抗議書九十五か条を公表したのは、一五一七年のことである。しかし、まもなくこれに対抗して反宗教改革がおこり、イグナティウス・ロヨラが一五三四年にイエズス会(以下においては、その信徒をジェズイットとよぶ)を結成したことも忘れてはならない。イングランドの宗教改革には、国家独立の気運の高まりがおおいに影響したが、ヘンリー八世の個人的な事情がその発端となったといえるだろう。英国国教会が確立するのは、一五四三年のことである。彼はいまでも人気のあるイングランド国王だが、その理由はさておき、彼の個人的事情から書いておこうと思う。

当時イングランドは外交的には、教皇を軸にしてスペインおよび神聖ローマ帝国、さらにフランスと覇権を争っており、同盟関係はめまぐるしく変化していった。ヘンリー八世は、兄アーサー王子が一五〇一年から二年に

かけて五か月間結婚生活をおくったアラゴン(スペイン北東部)のキャサリン(一四八五―一五三六)と、兄の死後に結婚し、二人のあいだに王女メアリー(一五一五―一五八)が誕生した。キャサリンと結婚したということは、当時国力を強めつつあったスペインと協力関係を維持することがイングランドにとって利益となるということでもあった。十六才でスペイン王となり、のちに神聖ローマ帝国皇帝をもかねたカルロス一世はキャサリンの甥であった。その後ヘンリーは、ヨーロッパの主導権を獲得しようとする甥の野望をおしとどめる必要からフランスに接近していく。ヘンリー八世の妹のメアリーはフランス王ルイ十二世と一五一四年に結婚する。こうした状況ではキャサリンの存在が邪魔になった。さらに、ヘンリーはどうしても息子がほしかった。男の王位継承者がほしかったのだが、王妃が息子を産んでくれる可能性は消滅してゆくように思えた。その頃キャサリンの侍女のひとりだったアン・ブリン(一五〇七?―一三六)と恋に落ち、キャサリンと離婚して彼女と結婚しようとしたが、教皇はそれを認めなかった。彼は六年ないし七年

という長期間にわたる交渉のあと、ついに教皇と断絶して庶民の出のアン・ブリンと結婚する。しかし、アンにたいする市民の反感ははげしく、結婚の儀式はひそかにおこなわざるをえなかった。一五三三年のことである。

アン・ブリンとのあいだにも一女が生まれるが、これがのちにエリザベス一世となる。生まれた子が女だったことにヘンリーの落胆はおおきかった。アンとの結婚はそれ自体が目的ではなく、王位継承者を確保するという目的達成のための手段であった。アンへの思いもすでにさめていた。しかも、アンは国内ばかりでなく大陸諸国でも不人気であり、イングランドは教皇はもとより、スペイン、神聖ローマ帝国、フランスとも対立することになり、孤立した。教皇はヘンリーを破門し、結婚は無効と宣言したため、アンの子供は庶子となった。ヘンリー八世は結婚後三年ほどして姦通の嫌疑でアン・ブリンの首をはねてしまう。姦通の相手として複数の名前があげられたが、アン自身の兄もそのひとりであり、全員が処刑された。

ヘンリー八世は六人の妃を迎えたことでも有名である

が、アン・ブリンの処刑翌日に結婚したといわれる三人目の妃ジェイン・シーマー（一五〇九？—一三七）は待望の男子エドワードをもうけるが、産後まもなく死んでしまう。六人の王妃のうち幸せな人生を全うしたといえるのは最後の王妃キャサリン・パーだけだった。第四王妃となったのはドイツのクレーフェのアン（一五一五—一五七）だが、一五四〇年に結婚したのち、ただちに離婚されてしまう。アンと離婚後すぐに第五王妃キャサリン・ハワード（一五二二？—一四二）を迎えたが、彼女も姦通罪で処刑された。第六王妃キャサリン・パー（一五一二—一四八）とは、一五四三年に結婚したが、彼女にとつてヘンリー八世は第三番目の夫だった。

処刑されたのは、ふたりの王妃だけではなかった。俗界と宗教界の最高権威者となったヘンリー八世は彼に反対するものを容赦なく処刑した。ヘンリー八世の宰相として絶大な権力を誇ったウルジー枢機卿も、ヘンリーの離婚を教皇に認めさせることができなかつたために、政敵との闘争にやぶれて解任され、裁判にかけられるはめになり、法廷にむかう旅の途中で病死した。ウルジーの

あとを継いだのは、『ユートピア』の著者であるトマス・モアだったが、彼は異端者として火刑に処せられることになる。アン・プリンを亡き者にするために反アン派を結集したトマス・クロムウェルも、クレーフエのアンとの結婚解消後に処刑されたし、フィッシャー枢機卿やバッキンガム公爵も処刑された。離婚に応じなかったキヤサリンは追放され、少数の人に見とられて亡くなった。アン・プリンの生年ははっきりしない。一五〇七年生まれとするものが多いが、それより早く一五〇一年、一五〇二年、一五〇三年と考えるものがある一方、一五〇一年あるいは一五二一年とする学者もいる。生年がはっきりしないのは、彼女だけではなかった。六人の王妃のうち三人の生年が確定できないのである。この時代は、国内的にも社会が大きく変化した時代であり、国王と実力をたくわえつつあった市民、旧貴族と新貴族、宗教界と俗界などさまざまなレヴェルで対立が激化し、不安定ではあったが、新しい機会にもめぐまれ、生年もわからない成り上がりものがたくさん誕生した。プリン家はまさにその典型であった。ウルジー枢機卿も肉屋のせがれ

からのしあがったのだ。善かれ悪しかれ、多くの人が国内外の時代の潮流に翻弄されたのだった。

ヘンリー八世が一五四七年に死去したあと、王位についたのは当然ながらエドワード(六世)であり、彼はイングランドの新教化につとめたが、十代なかばで亡くなった(一五三七―五三)。ところがあとを継いだメアリー(一世)はカトリック教徒であり、新教徒を迫害したために「血のメアリー」と呼ばれた(一五一六―五八)。ヘンリー八世がアン・プリンと結婚することに賛成したルター支持者のトマス・克蘭マーも、彼女によって火刑に処せられた。メアリーは一五五四年にのちにスペイン王となるフェリペ二世(一五二七―九八、存位一五五六―九八)と結婚したが、一五八八年にかの有名なスペイン無敵艦隊をイングランドにむけて発進させたのはこのフェリペである。彼女のあとイギリスの第一黄金期を築いたエリザベス一世が登場するが、彼女は新教徒であり、一五七〇年に教皇ピウス五世によって破門された。カトリック教徒は、これによってイングランド女王にたいて反逆者となる可能性がうまれたことになる。カト

リック教徒だったスコットランド女王メアリー（一五四二—一七八七）を処刑したことはあまりにも有名である。とはいえ、彼女はどちらかといえば中道的な立場をとり、頑固なカトリック教徒ばかりでなく過激な清教徒にも厳しい態度をとった。

第二次世界大戦後のイギリスの政治は保守党と労働党が交互に政権を担当し、政権交替のたびに国政が大きく変化し、無駄が大きかったといわれる。たとえば、労働党が企業を国営化したかと思うと、保守党が私企業化するといったぐあいである。ヘンリー八世の死後のイングランドについてもおなじことが言えるのではないだろうか。具体的な例は枚挙にいとまがないが、実に多くのひとびとが宗教上の理由により処刑されたのだった。カトリックとプロテスタントとの対立ばかりでなく、プロテスタント諸派の抗争の結果でもあった。カトリック教徒はパピストと呼ばれたが、彼らも一枚岩ではなく、あくまでもカトリック信仰を守ろうとする派と、体制に妥協的な派が存在した。エリザベス女王死去のあともこの状況は長年変わらなかった。国王のなかにもカトリック教

徒ないしそのシンパがいた。イギリス史上の重要な事件として、チャールズ一世の処刑と清教徒革命、アイルランドのカトリック教徒への弾圧などがただちに思い浮かぶ。「カトリック教徒解放法」が成立し、カトリック教徒にたいしてもプロテスタントとほぼおなじ政治上の権利が認められたのは、一八二九年のことだった。

フレイザーは『火薬陰謀事件』の「プロローグ」でエリザベス女王の死去とジェイムズ一世の即位の状況にふれ、本文ではまず一五九〇年代に目をむけ、王位継承問題をとりあげている。

ヘンリー八世の三人の子供にはみな跡継ぎがいなかった。エリザベス一世の跡を継いだのはスコットランド王ジェイムズ六世（一五六六—一六二五、在位一五六七—一六二五）であるが、彼はスコットランド女王メアリーと彼女の二番目の夫ダーンリィとのあいだの一人息子であり、イングランド王としてはジェイムズ一世（在位一六〇三—一六二五）である。彼は一才のときにプロテスタント貴族の監督下でスコットランド王に即位したが、たえず身の危険におびやかされながら生き延びた。ジェイム

ズがイングランドの王位を継承したとき、王冠が成人した男の手にわたったとして、人々は彼を歓迎した。長い期間にわたる処女王の治世のあとでは、王子と王女にかこまれた国王夫妻は新鮮にうつった。国王と王妃がおおぜいの幼い子供と一緒に民衆と友好的な関係にある情景を、イングランドが最後に楽しんでから、実に百年がたっていた。さらに、ジェイムズが死んでもイングランドが王位継承問題で悩まされることはないだろう、と人々は喜んだ。現実には、国王たるにふさわしいと期待された王子ヘンリーが一六二二年十一月に腸チフスのために死亡し、虚弱だった弟のチャールズが即位したが、議会と対立し、清教徒革命により断頭台にたたされることになるなど、スチュアート家は不幸に見舞われることになるのだが。

イングランドのカトリック教徒は、カトリックの王位継承者を擁立しようとしたが、ジェイムズが有力な候補者となると、カトリック認容政策を彼に約束させようと工作をしたと思われる。ジェイムズもカトリックの支持を得ようとして、彼らと交渉したばかりか、法王庁にも

カトリックへの改宗を匂わせさせたようである。王妃アンはすでに二十代にカトリックに改宗していた。ともかく多くのカトリック教徒が、まだスコットランドにいたときにジェイムズは認容政策を約束したと信じた。結局、カトリック教徒も彼を国王として認めた。フランスでユグノーが認められたように、自分たちも認められるであろうと期待した。新国王との蜜月の時期だった。

ジェイムズは近隣諸国との和平、スコットランドとイングランドの連合をめざすことになる。特筆すべきは、彼の発案により聖書の英訳がおこなわれ、いわゆる欽定訳聖書が一六一一年に出版されたことである。これが、シェイクスピアの作品とならんで、近代英語の形成におおきな影響をおよぼしたことは言うまでもない。

しかし、ジェイムズはまもなくカトリック教徒への規制を強めていった。王座についたいま、パピストと取り引きをする必要がなくなったのだ。それには、ジェイムズがスコットランド時代をふくめてたびたび生命の危険にさらされてきたこと、イングランド人一般のスコットランドへの反感・嫌疑が強かったことも影響したかもし

れない。しかし、なによりもカトリック教徒が国王から

恩顧と好意をえて「迫害が中止されるとともに、カトリック集団の力がただちに明らかになった」という恐怖が、彼らにたいする処罰を必要以上に厳しくしたのである。ここに事件の大きな原因がある。すでに即位のときに囚人が多数釈放されたが、カトリック教徒は故意の殺人犯とともに除外された。国教忌避にたいする罰金を宮廷内のスコットランド人臣下に集めさせたことも反感をかった。一六〇四年一月に議会が召集され、この会期中に王はカトリックへの厳しい態度を表明し、スコットランドでの約束を信じてカトリック教徒がいくくようになつた良心の自由にたいする希望は、事実上くずれ去つた。このあと四月二十四日に、すべてのカトリック教徒を無法者とする法案が下院に提出された。火薬陰謀が動き出すのも、ちょうどこの頃のことだつた。カトリックに不利な法案が通過し、迫害は弱まりそうもなかつた。陰謀参画者たちもこうした事態にはやおとなしく耐えていられなくなつた。とはいえ、彼らも平和的解決の手段を模索したのであり、彼らからすれば暴力は最後の

手段としての暴力だつた。

こうしたカトリック対策と同時に、ジェイムズは、国王の權威にたいして執拗に批判的な態度をとりつづける清教徒にたいしても、彼らをプロテスタント教会から追い出そうと強硬な態度にでた。清教徒がメイフラワー号にのつてアメリカに渡るのは一六二〇年のことであり、さらに次国王の時代に両者の対立が内乱へと発展していったことは周知のとおりである。

火薬陰謀がそもそも企てられたのかについて、事件直後から疑問の声があがつた。政府のでつち上げだという意見が当初よりあつた。そう考えたほうが納得しやすい点がこの事件に多々あることは否定できない。きわめて有名な事件でありながら、客観的に信頼できる資料の判別は難しいようだ。記録は不完全であり、証言といつても拷問にかけて得られたものである。政府があきらかに手をくわえたとされる証言記録も現存している。現在にいたるまで陰謀説支持派と陰謀説反対派の議論がつづいている。フレイザーの立場は、たしかに陰謀は計画されたが、それは政府側が主張する陰謀とはかなり違う



ものだったという立場である。

この事件の記念日は「ガイ・フォークス・デー」と呼ばれているが、陰謀の首謀者はガイ・フォークスではなく、ロバート・ケイツビーという一五七三年生まれのカトリック教徒、というよりジェズイットだった。彼はカリスマ性をもったたいへん魅力的な人物だったようだ。

陰謀に参画したのは総勢十三人にすぎず、彼らはケイツビーとほぼ同年代であり、ガイ・フォークスは軍人だったが、そのおおくが上流階級の間人であった。身の安全のために血族結婚によってみずからを維持してきた小さな世界に彼らのほとんどは属していた。真の信仰をいつわりプロテスタントとして世に認められなければ、彼らが大学で学位を取ることも、政府関係の仕事につくことも望めなかった。ケイツビーもオックスフォード大学に在席はしたが、中途退学した。挫折感に悩まされていた。同宗信徒が抑圧された生活にあまんじているのに我慢がならなかった。積極的な行動によって解決をみいだそうとしたとしても不思議ではなかった。彼は、爆破の対象に議事堂を選んだのは、「あの場所で、彼らはわれわれ

にあらゆる危害を加えてきた」からだと言った。彼らは一般のカトリック教徒がおおぜい支持してくれるものと考えたし、スペインとイングランドのあいだで和平条約が締結されたあとも、カトリックの強国であるスペインも支援してくれるのではないかと期待し、その工作もした。議会を爆破すると同時に、王女エリザベスを誘拐して、彼女を王位につける計画もたてた。しかし、火薬に火をつける以前に事件は発覚してしまい、その後彼らに回調するものはいなかった。

議会開会日が十一月五日ときまるまでに、すでに二度にわたって延期されていた。その間にケイツビーは計画をさらに練り、同志も最初は五人だったが十三人にまでふやすことができた。ということは、他方では計画が周囲にもれ、さらには裏切り者がでる可能性もはらんでいたことになる。それがだれであるかは断定できないようだが、実際に裏切り者がでて、陰謀は未遂に終わることになる。十月二十六日に事件をほのめかす一通の手紙がある貴族のもとにとどき、政府は積極的に動きだし、フォークスの逮捕にいたる。ケイツビーらはウェールズに

逃げる途中で政府軍に包囲され、銃撃戦で彼とほかに三人は死ぬが、負傷したのも、その場にいなかったものも全員逮捕され、裁判のあと反逆罪で絞首刑に処せられた。当時、事件は「火薬反逆」と呼ばれていた。

しかし、処刑されたのは彼らだけではすまなかった。翌年一月二十七日に、イングランドにおけるジェズイットの最高責任者であるガーネット神父が信者の家に隠れているところを発見される。ジェズイットの神父が事件にかかわっていたことを浮き彫りにしようとする躍起になっていた政府は、彼を首謀者として「陰謀の常習犯であるジェズイットがたくらんだ事件」に仕立てあげる。たしかに彼はある神父の告解をつうじて陰謀について情報をえてはいたが、陰謀にかかわっていないどころか、ケイツピイラを押し止めようとしたのだが、反逆罪をおかしたとして絞首刑に処せられる。政府にとって「重要なのは、カトリック教徒の逆行行為を実証し、彼らを根絶するのは、そのためであって、宗教上の信念のためではないことを全世界にむかつて証明すること」だった。さらに、神父を保護するために隠れ家をつくった平修士や友

人・召使らも犠牲になった。カトリック教徒への締めつけもいっそう厳しくなり、折にふれて反カトリック運動が高まりをみせることになる。ただし、ケイツピイと親しい関係にありながら、幸運にも大陸に逃れることができたジェズイットの神父も二人おり、カトリックの立場からこの事件について貴重な記録を残している。

なぜイングランドのカトリック教徒とくにジェズイットが為政者に嫌われたのかといえば、彼らは教皇の精神的権威を国王のそれよりも優先させたばかりか、さきふれたように、カトリック国スペインの軍事的な支援すら期待したものがいたからだ。スペインに巨額の金をだしてもらい、それで国王から認容を買うという道をさぐったものもいた。イエズス会は反宗教改革の先頭にたつ戦闘的な修道会であった。彼らは教皇という外国の権威者の回し者とみなされた。国王といえども、教皇に破門されれば、生命が危険にさらされたのである。現実にはスペインは一五八八年に無敵艦隊をイングランドに発進させたばかりか、一六〇一年にはアイルランド南端のキンセールを攻撃している。イングランドの平均的なプ

ロテスタントにとっては、スペインで異端審問がさかんだったことも恐怖のたねだった。

著者フレイザーは、陰謀者をテロリストと断定し、現代にいたるまで絶えることのないテロ活動について考察している。テロリズムの道徳的基盤とは何か。テロリズムが正当化されるのは、それが成功した場合のみなのか。今日の世界の指導者のなかには、過去において率先してテロ活動にかかわったものがある。テロリストを生む原因がなくならないかぎり、テロ活動は今後もなくならないだろう。多くの人が火薬陰謀事件について書いてきたが、だれしも自分が生きている時代と比較する傾向がある。フレイザーはつぎの言葉を引用している。「だが、私がサボタージュを計画したことは否定しない。しかし、自暴自棄になって、あるいは暴力を愛するから、それを計画したのではない。同胞にたいする長年の暴政、搾取、抑圧から生じた政治情勢をじっくり冷静に評価した結果として、計画したのだ。」これは火薬陰謀参画者ではなく、一九六四年にリヴォーリ裁判でアフリカ国民会議の指導者として被告席にたたされたネルソン・マンデラの言

葉である。

フレイザーの『火薬陰謀事件』は、あたかも探偵小説を読むかのように事件についてたいへん興味深く書かれているばかりでなく、信仰とテロリズムについて考えるうえでも示唆に富んでいる。フレイザーは陰謀事件に参加したものをテロリストと断定してはいるが、彼らが見じんも私利私欲にとらわれておらず、行動は別としても動機が高貴で理想主義的であったことに哀惜の念を禁じえないでいる。当時の女性カトリック信者のはたした役割にも注目し、当時女性性は弱きものとされていた立場を利用して、カトリック信仰の維持に貢献し、ジェズイットの神父たちを陰でおおいに支えたと評価している。彼女らは法律的にかなり特権的な立場にいた。根本的に女は無責任なので、女は罰せられないという意識があった。たとえば、権利欠如しがたつて財産欠如のために女性信者には罰金を課すことがむずかしかった。そのほか暴君殺しをめぐる議論、罪のないものをも事件に巻き込んでいいのか、告解でえた情報を流していいのか、窮地を逃れるためなら二枚舌をつかってもいいのかなどをめ

ぐる議論、シェイクスピアと事件との関係や「ガイ・フ  
ォークス・デイ」の変質についての説明など、本稿で  
詳しくとりあげられないのが残念だ。あとに残された家  
族・友人たちや王室のその後についても、当然といえば  
当然だが、ふれている。現イギリス女王エリザベス二世  
は、事件で誘拐の危機にさらされた王女エリザベスの直  
系の子孫である。

アントニア・フレイザーは一九三二年の生れで、オッ  
クスフォードで学んだ。彼女のおもな著書は、『スコッ  
トランド女王メアリー』（一九六九）『クロムウェル』  
（一九七三）『チャールズ二世』（一九七九）『弱き器  
十七世紀イングランドにおける女性の運命』（一九八四）  
『ヘンリー八世と六人の后』（一九九二）などである。ほ  
かにミステリーやテレビ劇も書いている。夫君は劇作家  
のハロルド・ピンターである。一九九〇年以來イギリ  
ス・ペン・クラブの副会長をつとめている。

東北公益文科大学紀要の創刊を祝して、「公益」とは？  
という疑問をたえず念頭におきながら拙稿を書かせてい

ただきました。

本稿を書くにあたっておもに参考にしたのは、フレイザ  
ーの著書は当然として、キャロリー・エリクソン『ア  
ン・ブリンの生涯』（拙訳）およびその「訳者あとがき」  
である。なお、エドワード六世からメアリー一世への王  
位継承がすんなりとはいかなかったことをつけ加えてお  
きたい。エドワードは一五五三年七月六日に亡くなった  
が、メアリーが即位を宣言するのは同月十九日のことだ  
ある。その間に、漱石が「倫敦塔」に哀惜の念をこめて  
書いているジェイン・グレイ（一五三七―五四）が登場  
する。彼女はヘンリー七世の曾孫であり、義父らに利用  
され同月十日に女王として宣言されるが、メアリー側に  
敗北し、翌年二月十二日に王位篡奪者として処刑された。  
彼女は九日間王位にあつたことになる。漱石はロンドン  
塔でガイ・フォークスの叫びも聞いている。「今一時間  
早かつたら……。此三本のマッチが役に立たなかつたの  
は実に残念である。」（年月日についてはキャロリー・エ  
リクソンの『血のメアリー』を参照）